

15日目 10月31日(十月四日)

測地・久留村、下田村、白木河内村、

早浦村、一町田村、平床村、

一之瀬村(天草市河浦町)

泊地・下田村(天草市河浦町)

《測》 朝曇天。

両隊とも7時頃出発。

【伊能隊】伊能、下河辺、青木、永井、長蔵。

久留村飛地下田界より始める。即鎌印を残す。下田村、白木河内村大友、久留村主留、早浦村路木、吉野浦迄測る(10・1km)。

ほかに早浦村ヒレ島一周を測る(0・6km)。
16時30分頃帰宿

【坂部隊】坂部、上田、箱田、平助。

鎌印より、下田村、一町田村、平床村、市之瀬村、津留村まで横切り、10月19日中田村より測量した地点まで(7・2km)。
16時頃帰宿。
宿は前日同。

この夜晴れ曇。天文測量。

《測》(欄外) 中田から一町田迄下田街道、13・2km。

《巡》 朝晴れる。

坂部様隊は(明日より)福連木村横切りの予定のため、都呂々村庄屋が福連木へ来る。

伊能様隊は、当村より早浦まで測量。

坂部様隊は、津留村まで横切り測量。

両手共14時過ぎ宿に到着。宿は前夜同。

夜分天文観測を古城跡にてする。

久玉村大庄屋下田泊まりに出勤付添。

《宜》 晴れ。西風

下田泊所に測量方の聞きあいに飛脚を出す。

測量方は、下田泊より明五日二手に分かれ測量。

伊能勘解由様は西廻り明五日崎津泊まり、六日高浜泊まり。

坂部貞兵衛様は明五日、福連木泊まり、六日都呂々泊まり、七日に二手とも下津深江に泊まる予定。今富演五右衛門方より申し来る。

なお、下田より一町田組庄屋中よりも返書が到来する。

古城跡

古城跡とは、崇円寺の裏手にある河内浦城の跡であろう。現在は、河内浦城公園として、整備されているが、当時は恐らく廢城のまま捨て置かれていたと思える。だとすれば、天体観測には、触書にもあるように、10坪ほどの広さが必要なので、草刈りや機材を運ぶ道づくりが村人の手によってなされたと思う。

折角なので、河内浦城跡にある、市の案内板を紹介しよう。

河内浦城について

河内浦城は、天草五人衆の一人、天草氏の居城です。建武四年（1337）五月三日付けの『志岐文書』に「山鹿兵藤太郎高弘申肥後国天草郡本砥島并龜河地頭職之事、請文披見訖、両度催促之処、河内浦大夫三郎入道構城郭、尚使者放矢、至自放火」という記述があります。崇圓寺裏の今の城山が詰めめの城で寺の境内は館跡地と思われます。向い山も「城山」と呼ばれる下田城跡ですが、当時はこれらが合わさって一つの城を

構成しました。

ルイス・フロイス宣教師が記述した『日本史』には「天草氏の領内には35の村落と四つの城があり、かの殿の主な居宅は河内浦という地にあり」と書かれています。

肥後藩が幕府に提出した『肥後国大道小道等調帳〔慶安四年（1651）〕』に「下田古城 山城曲輪式百七拾間 右之古城より下田村迄弐町」とあります。

江戸時代の寺沢広高統治の時代まで残った中世城跡は「栖本城・佐伊津城・久玉城・河内浦城・軍ヶ浦」の五城です。この中で河内浦城と栖本城は元和元年（1615）の「二国一城令」で城を割って、完全な屋敷構えになったと『並河太左衛門記』にあります。この時まで河内浦城代をつとめていたのが太左衛門の父兵右衛門でした。

（注）現在のところ軍ヶ浦に城跡は確認されていません。

ルイスフロイスの日本史の正確には。

「天草の諸領域は、長さが十四里、幅は所によっては五、六里、または二里である。領内に三十五の村落と四つの城があり、かの殿の居宅は河内浦カフチンウラという地にあり、殿には四人の息子と二人の（兄）弟がいた。」と記されている。

(ルイスフロイス日本史9 大村純忠・有馬晴信編
島原・五島・天草・長崎布教の苦難 中公文庫 1283)

四つの城とは、河内浦城、本渡城、久玉城、宮地城のこ
とが。

崇円寺

忠敬らが宿泊(2泊)した崇円寺は、天草四ヶ本寺の一
つで、寺領三十石。天草初代代官鈴木重成は、天草の乱で
荒廃した神社仏閣を立て直して、人々の民心の安定を図ろ
うとした。そこで、幕府より、寺社領三百石を授かり、各
寺社に配分した。その中でも、特に柱となる寺を四ヶ本寺
という。四ヶ本寺は、本村の東向寺(曹洞宗・50石)、志岐
村の国照寺(曹洞宗・45石)、湯船原村の円性寺(浄土宗・30
石)、そして一町田村の崇円寺(浄土宗・30石)である。

この崇円寺の石段下に、伊能忠敬天草測量の唯一の標柱
がある。それによると。

伊能忠敬は、大日本沿海輿地図作成のため、文化七
年(1810年)十月三日から四日まで河浦一帯の測量
と、河内浦古城跡で天体観測を行い、その前後天草に



崇円寺 河浦町一町田

五十六日滞在したという記録があります。

忠敬の測量日記には、古城跡で天文観測をしたということとは記されてなく、宜珍の巡廻日記にその旨が記されている。また、56日間は誤りで54日間（測量日数は53日間）である。

横切り測量

横切りとは聞きなれないが、横切り法という測量方法である。忠敬の測量法は、導線法・交会法とを合わせたものが基本であるが、これに横切り法を使って、より精度を高めるために用いられた。

複雑な海岸線など測量が正確に測れない箇所の場合、岬の付け根に横切りルートを作って測ったり、並行する街道を測って、ところどころで沿岸測線につなぐ。また、全体的な地形確認にも用いられた。海岸を一周しただけより、内陸を縦断して測ることによって、より精度を高めている。天草の場合、中田村から一町田村まで、一町田から福連木經由都呂々まで、河内村から草積峠・草積峠から下津浦村までなど数か所で横切り測量をしている。○

伊能測量は、沿海中心であるが、内陸部もかなり測量し

ていることに注目したい。天草のように小さい島はともかく、日本列島レベルで見ると、かなり多く内陸部の測量もしている。それは第七次測量行程図（写真ページ）を見ると明らかだ。

なお、下田村という地名が出てくるが、下田温泉の地ではなく、現在の河浦町一町田、崇円寺がある地である。下田温泉のある村は、下津深江村といった。

16日目 11月1日（十月五日）

測地・一町田村、益田村、今村、早浦村、

今富村、崎津村（天草市河浦町）

福連木村（天草市天草町）

泊地・（伊能隊）崎津村（天草市河浦町）

（坂部隊）福連木村（天草市天草町）

《測》 朝曇り晴れ。

手分けして測量。坂部隊は下田村より都呂々村迄大横切り。共に7時前頃下田村出発。

【坂部隊】坂部、青木、箱田、平助。（以下10月8日

までは、名前省略。）

一町田村、昨31日の○印より始める。

倉田、平畑、平野、それより益田村倉谷、今村板河内、五太郎峠、福連木村山の口まで測る。（福連木村内御林山、門山、帯山、薄木山。御林御用木は柁櫃なり。

この節御役にて御用木145本、毎日福連木村より百姓2人宛て山番に出る。12km）。

16時頃、福連木村着。

宿・庄屋尾上文治。

【伊能隊】伊能、下河辺、永井、上田、長蔵。（以下

10月8日まで、名前省略。）

早浦村吉野浦より始める。

土手内、河ヶ迫、今富村飛地小島・四名田、竹藪、それより今富村飛地小島飛地界、崎津村飛地界、白岩まで測る（8・4km）。

それより、30日に先手始め、箱崎より崎津村落戸まで測る（0・8km）

13時前崎津村へ到着。

本陣・庄屋吉田宇治之助。

脇宿・折七。

この夜晴天、天文測量。

《巡》晴天

5時頃下田村出発。中田村庄屋付添。

坂部様隊は福連木村へ横切り。都呂々村まで通るつもりで、福連木宿泊。

伊能様は、早浦の残り分を測量。崎津村へ泊りのつもりで14時頃崎津村へ着船。

伊能様宿・崎津村役座。

下河辺、永井様宿・織七（《測》では折七）宅。

代官様宿・多田屋新宅。

付廻り衆・薩摩屋。

崎津と隠れキリシタン

この日から、本隊と支隊とに分かれて測量する。本隊（伊能隊）は海岸沿いを河浦（現）から大江、高浜、小田床村まで。支隊（坂部隊）は、内陸部の河浦から板の河内を抜け福連木、都呂々木場、都呂々。都呂々より海岸沿いを南下、下津深江、小田床村まで。再度と都呂々木場より山越えて年柄村、内田村、志岐村を測量し、富岡で合流している。

伊能本陣は、崎津村庄屋吉田宇治之助役宅。この地に現在、崎津教会が建っている。この崎津教会の祭壇の位置で、絵踏みが行われていたという。この崎津村には、大江村や今富村などと共に、多数の隠れキリシタンが存在し、それが発覚、天草を揺るがす事件が起きている。伊能測量の七年前である。後に「宗門心得違ひ」または「天草崩れ」と呼ばれる事件である。

享和三年（1803）、今富村（現在の天草市河浦町今富）付近で、密かに邪宗門を信じる者があるとの風聞が流れた。その一つの怪しきものとして、牛殺しが行われたというものである。当時、牛馬は農耕にとって欠くべからざるものであり、かつ仏教の精神によって、牛馬を殺すことは法度であった。

牛を殺すには、キリスト信徒が祝日に牛肉を神前に供え、これを食するという習わしがあったためである。

そこで役所は今富村庄屋上田友三郎に、内情探査をさせ、同時に志岐村国照寺の大成もまた陣屋の内命を受け同地に赴いて、共に家々の臨検説法を行なった。

邪宗門とは勿論キリスト教である。幕府は、天草島原の乱後、最大施策として、キリスト教禁止を掲げ、乱から1

65年経った当時でも、度々の禁止お触れや、廻村を行い宗門改めと称する絵踏みなど、その取締に余念がなかった。それでも、隠れ信者が潜んでいたということで、当時の為政者の驚きは大変なものであった。

当時の天草は、島原藩預かりであった。この対策如何では、藩の取り潰しにまで発展する恐れすらあった。

今富村庄屋・上田友三郎は、上田宜珍の弟である。もともと今富村の庄屋は、大崎氏であった。その庄屋吉五郎が若くして亡くなり、その息は幼年（3歳）であったことから、高浜村庄屋であった上田宜珍が、代官所の命で兼帯庄屋となったが、間もなくして、宜珍の弟で養子となっていた、友三郎が専任の今富村庄屋となった。

この邪宗門対策に、上田宜珍、友三郎を送り込んだとの説もある。殊に宜珍は、代官所でも特に信頼を置いている存在であったためである。

文化元年二月二日〜二月二十六日 上田庄屋は、探索を進め、二日には、信者嫌疑者として25名、牛殺し嫌疑者として9名を挙げたのに続き、二十六日には、さらに26名を富岡役所へ報告する。

探索を続けていくうちに、今富村のみならず、隣村の大

江村、崎津村でも信者がいることが発覚した。これまで内々に進めていた探索が表ざたとなる。

そして島原藩はこれらの嫌疑者を検挙することにし、吟味奉行が出發する。さらに、吟味奉行は、山方役や大庄屋を陣屋に招集し、取り調べを本格化する。

更に、宜珍の高浜村にまで、信者がいることが分かった。現在でいう被疑者・容疑者を富岡陣屋まで出頭させ、取り調べを行った結果、ほぼ全容が解明する。

この事案に対して、大きな事件に発展することを恐れた当局側は、検挙し罰則を与えるというだけでなく、誤りを糺すという方針をもって臨んだことは幸いであった。

それは、取り調べに当たって、拷問を与えたりするのではなく、密かに宗教的異物を持っている者は。それを夜半こつそりと、指定したところへ投げ込めさせたり、滾々^{こんこん}とあなたたちは間違った教えを信じていると説諭したことがある。

この方策を立て、当局にそれを実行させたのはやはり宜珍だと言われている。その結果、心得違いということに改宗させて事なきを得た。

最終的に心得違いの者は5205人にも及んだ。村ごとの割合は表の通り。

心得違い者数

村名	隠れ信徒		総村人高		比率 信徒/村人 (%)
	人数	戸数	人数	戸数	
大江村	2,132	441	3,143	569	67.8
崎津村	1,710	不明	2,401	209	71.2
今富村	1,047	不明	1,836	159	57.0
高浜村	316	88	3,320	579	09.5
合計	5,205		10,700	1,513	48.6

資料・「宗門心得違い事件」より 比率は筆者計算
崎津村の人口は3,143人説もある

これを見ると、いかに多くの人々が、心得違いを
たということが分かる。

実に驚くべき数字である。よくもこれだけの割合で隠れ
信者が居たにも関わらず、これまでよくも表ざたにならな
かったものだ。

さて、これをキリシタンと見なさず、心得違いとしたの

には、余りにも多くの村人が関わっていたこともあったろうが、どう調べても、純粋なキリスト教徒ではなかったということである。

それは、天草から指導者の司祭が居なくなつたため、キリスト教を正しく伝えることが出来なくなつたためである。したがつて、当初は、正規なキリシタンであつたが、親から子へ子から孫へと何世代も経る間に、大きく変容した。ただ先祖から伝わつたため、守つていかねばならないとして、受け継がれてきたが、それは意味を持たないものとなり、何時しか土俗的宗教となつてしまつた。

それは、彼らが唱えていたオラショや仏教的なものと同体したような具物等が全くキリスト教からは逸脱していることから分かる。ただ、守られていたのは、絶対隠れて信仰しなければならぬということだけであつた。そのため、取り締まる方としても、キリシタンと認定できなかつたためでもある。

もつとも、取り締まる側自体も、キリスト教の何たるかもわからなかつたかもしれないが。

この研究を続けている、浜崎献作氏は、「隠れキリシタンではなく、伝承キリシタンと呼ぶべき」と言う。

また、この隠れ信者発見で、隠れ・伝承が無くなつたとはいえず、なんと昭和初期まで続いたというから、宗教の

力はすごいものがある。また、伝承と言える理由の一つとして、明治以降に真のキリスト教が再度入つてきたが、この隠れ信者たちは、それを拒んだという。

それは自分たちが信じ守り通してきた宗教と、明治になつて入つてきたカトリックがあまりにも違つていたためだ。

上田宜珍大庄屋格へ

この心得違い事件の解決に貢献したとして、上田宜珍以下大庄屋庄屋達へ、幕府より褒美が下されている。特に宜珍は破格で、大庄屋格・帯刀御免を申し受けている。以下、宜珍日記にこの賞美の事が記されている。

(文化五年) 正ノ廿九日

一富岡方船ニ而罷歸 昨日御役所ニ而被仰渡 左之通

御出席 御役人 荒木武太夫様

小川佐十郎様

御目付 松本岩兵衛様

御代官 渡辺良助様

小川仁兵衛様

旧臘(去年の暮) 二日公事方御奉行松平兵庫頭様方御書付を以被渡候

其御預所肥後国天草郡之内 異法持候もの共吟味一
味ニ付骨折候村方之者共 御賞美之儀先達而被申聞候
趣を以 伺之上牧野備前守殿依御指図 左之通被下
之候

高浜村庄屋 上田源作

以来其身一代大庄屋格申付

帯刀御免白銀十枚被下之

天草郡相続方調掛 江間新五右衛門

御領組大庄屋 長岡五郎左衛門

志岐組大庄屋 平井為五郎

久玉組大庄屋 中原新吾

右四人江白銀七枚宛被下之

大江組大庄屋 松浦四郎八

大矢野組大庄屋 吉田長平

福連木村庄屋 尾上文平

都呂々組庄屋 酒井兼右衛門

右四人江白銀五枚宛下之

今富村庄屋 上田友三郎

崎津村庄屋 吉田宇治之助

右式人江白銀三枚宛被下之

右之通ニ付夫々可被申渡候

卯十一月

右之通被仰付候間難有可奉頂戴之段被仰渡候 為五

郎新吾兼右衛門へハ出府ニ付於江戸表被仰渡候 何れ

も御請印形可仕旨被仰渡印達差上候 扱々冥加至極

難有御事ニ候 松浦氏不參銀子御渡受取置候処 夕

方御出候故慥相渡ス 文平殿不文治名代

一拙者儀大庄屋格へ被仰付候ニ付 坐席之義長岡氏方

御伺之処 町役人中方上席ニ被仰付候段 御代官様

方被仰渡候

一御部屋々々江御禮ニ相廻而引取

一尾上文平 去冬隠居願之通御免被仰下 出勤中出精

候ニ付金式百疋被下置 跡御役儀倅文治江被仰付候段

被仰渡候 文平不參ニ付拙者名代ニ而承候様被仰聞候

大庄屋格、帯刀有難く受ける事。また平井、中原、酒井

氏は出府中のため、江戸表で仰せ渡しがあつたこと。松浦

氏は欠席したため銀子は取り置いたこと。尾上文平は隠居

しているため、文治が代わりに参つたこと。

宜珍は大庄屋格となつたため、坐席が町役人より上席に、

代官より仰せつけられたこと。などが説明書きのよう

にして記されている。

平井氏ら三氏が出府している理由は、文化三年より減税願いをしているが埒が明かないため、出府して直談判に及ぶためである。結果はどうであったかという点、向こう10年間年貢1150石、11年目から5年間は750石、16年目5年間は350石の減免で、その後元に戻すとの許しがあっている。(近代年譜)

福連木の御用林と天草櫨

11月1日の坂部隊測量日記に、「福連木村内御林山、門山、帯山、薄木山。御林御用木は柁櫨なり」とある。

ところで「柁櫨」というのはどういう意味だろう。柁は紅葉、櫨は櫨の木のことであるが、よく分からない。そこでよくよく調べてみたら、葉長櫨の事であるようだ。「はながかし」が「柁櫨」と誤ったか、当時はそう表記されていたか分からないが。

ネットで調べてみると。

「槍柄材として、江戸幕府將軍家に直納されていたのは、優れた堅さと弾力性を持ち、真っ直ぐ20m以上生長する天草の葉長櫨（ハナガカシ）という種類」

「江戸時代に風靡した天草ブランドの葉長櫨は、現在

では福連木国有林に僅かに残るのみとなり、希少種に指定され、伐採は不可」

また、川路聖謨の日記には。

「天保十一年十月十日 昨日、嘉十郎と槍を遣い、組合い候処、槍の上へ互いにころびて、槍折れ候いぬ。よつて、ここのかしの柄を取寄せみるに、おさおさ天草「天草かし、肥後国天草特産白櫨・槍柄に好適」のごとし。かしは海辺によろしきかもしらず。」

◇ 参考資料

<http://www4.kcn.ne.jp/~hozoin/151122hanagagashi.htm>

<http://www4.kcn.ne.jp/~hozoin/shimanesusami.htm>

この櫨が自生している山一帯は、現在官山と呼ばれているが、徳川時代は、幕府の御用山（御林と呼ばれた）であった。ではなぜ御林となったかという点、この山の櫨の木が槍の柄に最適であるということが分かったからである。なぜ分かったかという点とは、分らないという。そのため、この櫨の木を徳川將軍家の槍の柄にするため、村人が立ち入ることも許されない山となった。

文政元年（1818）の書上げによると、規模は、角山、帯山、薄木山、これに添え山として若林山、石原山合計で、

900町6反(約900ha)に及んだ。また、木の数も管理され、総樹木数は、11万4千812本、但しほとんどが雑木であった。わずかの檜の木を守るため、あるいは切り出すため、とてつもない雑木まで管理するということは、当時の幕府権力の強大さを物語るものであろうか。(『天草歴史談叢』田中昭策)

当時の村人の生活は、朽ち木や生木、枝を炭や燃料に、落ち葉を肥料にするなど、山は大変重要なものであったが、御林になると、留山となり、村人の立ち入りも禁止された。管理、監督は、富岡附き山方役の江間家及び福連木村庄屋尾上家が、専任の山守を常置して見回っていたという。台風などによる損害が発生した場合は、富岡役所から役人が直接出向き、山方役人、村役人立会いのもと早速倒木数など被害状況を詳細に調べ、後日村人による仕業でないことの証にしたという。

槍柄木の切り出しは、代官差配の元、山方役人、庄屋立会いのもと行われた。元禄十四年(1701)には、槍製造業者の請負として行われ、京都の槍屋と長崎の具足屋が7千本もの大量な木を伐り出している。また、宝永五年(1709)からは、13年ごとに定期的な切り出し制となり、安政五年(1858)まで続いている。

伐採した檜は、4、5mに切り詰め、山方役人が付添、

下津深江まで運んだ。そこで1週間潮漬けにした後、筵に包み、切り口は上質紙で目張りをして、船で大坂や江戸へ運ばれた。よく時代劇で登場するシーンに、御用品や献上品の運搬に接したものは、土下座をさせられるのがあるが、この檜もまたその類であったようだ。

福連木村庄屋 尾上文治公雄

(1778-1837)

11月1日(十月五日)坂部支隊が泊まったのが、福連木村九代目庄屋尾上文治宅。

この尾上文治は、上田宜珍の影響を受けて、宜珍と同じ本居太平に歌を学んだ。

多忙な村政と村内にある幕府御林の管理を勤める。徳川将軍家の槍の柄は、福連木のもに限られていたためだ。

この御林と呼ばれた山の管理・監視は尾上庄屋家の重大任務であった。

文治の名は、庄屋としてより文化人として名高い。文政九年五月より宜珍の師でもある紀州本居大平の門に入り、歌道に精進する。

天保八年(1837)十一月二十九日歿。法名 解脱院 釋證道居士。墓は福連木の山中にある。



福連木村庄屋 尾上文治の墓（天草町福連木）と肖像

17日目 11月2日（十月六日）

測地・崎津村（天草市河浦町）

大江村、福連木村（天草市天草町）

都呂々村（苓北町）

泊地・【伊能隊】崎津村（天草市河浦町）

【坂部隊】都呂々村（苓北町）

《測》

朝曇天

【伊能隊】

7時出発。

崎津村落戸より始める。程屋、中ノ迫、月河原、今富地先、崎津村（上湊）田の迫、庄兵衛ノコバ、それより崎津村の人家続き、舟津、下町、蛭月迫、三森、小高、それより大江軍ヶ浦、洲崎、平田、大浦、中浦、碓瀬まで測る（落戸より崎津の宿まで3・3km、宿よりセドノまで5・6km。外、黒瀬鼻1・3km、合計10・2km、外に宿まで27m）。16時頃に帰宿。宿は、前日同。17時ころより小雨。

富岡町年寄・高崎伝左衛門来る。

【坂部隊】

6時ころ福連木村出発。

同所山ノ口より猿越峠（則村界）、都呂々村登尾峠を越え、都呂々村木場[㊦]まで測量（8・4km）。

15時都呂々着。

宿・都呂々村庄屋酒井平太兵衛。

《巡》曇天

坂部隊は都呂々村へ泊との事。

崎津向辺田より始め、町通り測量。崎津村おちとより

大江村の内外黒瀬まで済ませ宿着。

富岡町年寄高嶋伝左衛門当所まで来る。

富岡町の町役人

先に本隊に面会を求めてやってきたのに、町年寄という役職がついている。

この町年寄とは。

富岡町は、代官所の所在地であったため、天草郡内でただ一つだけ町制が布かれた。大げさだが、現代の日本でい

うと、東京都のようなものだろう。そのためか、富岡町には村政と違い、町年寄や庄屋がいて、若干形態が違っていた。

この制度発足について、天草近代年譜には次のように記されている。

明暦三年（1657）新に、一丁目左衛門を町年寄に加え、二丁目には町庄屋を置く。即ち、先支配来^{しよそと}城外の二区にのみ、三丁目（岡部家）、五丁目（田中家）と町年寄二名を配置の処、さらに城内民家をも町掛りとすべく、一丁目（村川家）一名を加え、二丁目には町庄屋（荒木家）一名を配置し、以って町政の完璧を期す。

町年寄と庄屋。なかなか複雑だ。この町年寄は、庄屋と同じく世襲制であったが、交代もあった。

近代年譜の「組々村々庄屋」には、延享三年（1746）には、富岡町年寄の一人が（田中）傳左衛門となっているが、寛政八年（1796）には高嶋喜八郎となっている。

この年の富岡町役人として、次の名が記されている。

富岡町庄屋 荒木市郎左衛門

同 町年寄 村川弥藤次

同 町年寄 岡部伝四郎
同 町年寄 高嶋喜八郎

同じく近代年譜本欄では、安永五年（1776）には田中、文化十年（1813）には高嶋となっている。この（田中）から高嶋への交代時期は「苓北町史」によると、文化十年（1813）となっているが、近代年譜では、それより早い寛政八年に高嶋になっている。宜珍の巡廻日記では高嶋となっているので、その前に交代があったものと思われる。したがって、伊能日記の高崎は高嶋の誤記である。

また、苓北町史では岡部は鶴田へ安政二年（1855）に代わっているとしているが、年譜では安政六年（1589）時は岡部のままである。

詳しくは、「苓北町史」第4章近代 四 天草郡の行政機構で述べられているので、参考にされたい。

なお、○付苗字は、庄屋、町庄屋、町年寄が寛政八年（1796）苗字御免以前のためである。

18日目 11月3日（十月七日）

測地・崎津村（天草市河浦町）

大江村、高浜村（天草市天草町）

都呂々村（苓北町）

下津深江村、小田床村

（天草市天草町）

泊地・【伊能隊】高浜村（天草市天草町）

【坂部隊】下津深江村（天草町）

《測》

前夜より大風、曇り、波荒い、小雨度々降る。

【伊能隊】

6時、崎津村出発。（測量一手同前）。

昨日測り終の碇瀬まで。波荒く、船で行くことは困難。歩行して大江村迫との町見梵天より始める。横浜、沖ノ原、高浜村西平、ヲホソウヅ迄測る（7・3km、外に大江村江崎片側327m）。

17時に高浜村到着。

宿・庄屋源作（家作広よし）。

この夜曇り晴れ、雲間に測量。

【坂部隊】

6時頃都呂々村出発。昨日測り止め⊕印より始める。海辺を逆測。

小松川、上萱、下津深江村下萱、小田床村鬼岡浦

横枕迄測る(9・1km)。

15時頃下津深江村到着。

宿・庄屋西島郷助。

《巡》

曇天 戊亥(前夜19時から23時ころ)から風が強く、雨が止むことなく降り続けている。

7時頃乗船。風波が強いがそれを押して測量をするつもりで出発。しかし船による測量は困難であり、俄かに海辺に道を作り、測量をして、大江高浜境まで済む。16時ころ高浜着。

御用向き・坂部貞兵衛様返事 伊能勘解由裏封

右の書状を渡されたため、飛脚で大庄屋中の添書を付けて、国照寺領、志岐組、富岡町、井手組まで書状帳面を送る。御用向きの相談が色々ある。

上田源作快気 今日より又々勤める。

伊能様他全員宿・高浜村役座。

代官様宿・善作宅。

付廻り衆宿・新左衛門宅。

郡中荷物方宿・伯英老宅。

竿取宿・徳次郎宅。

坂部様は下津深江へ泊まり。

今晚天文観測を実施。

《宣》

測量方御役人

伊能勘解由様

下河辺政五郎様

永井要助様 総上下10人

右御役人様方崎津出立 陸通り大江村海辺測量当村大そうづまで来る。それより千の通りを通り15時頃着き泊まり。

付添代官 藤本恕助様上下三人。

付添大庄屋 中原新吾。

吉田長平。

庄屋 橋口嘉左衛門。

大堂作右衛門。

伊能様・下河辺様・永井様

竿取共に総上下10人宿役座。

付添代官藤本恕助様 上下三人宿・善作宅。

付添大庄屋宿・新左衛門宅。

郡中通夫宿・徳次郎宅。

郡送物宰領、料理人利十共に三人宿・伯英宅。

難所・天草灘西海岸

鬼岡浦とは鬼海が浦の間違いであろう。それとも当時は鬼岡浦と呼んでいたのか。地名は字名、小字が多く出るので、分らない所が多いが、中には現在ではなくなった地名も多い。

本日の本隊測量地は、天草西海岸でも一番の風光明媚なところである。今日では、藪椿が自生している地は西平公園として整備され、桜も多数植えられ、また夕日のスポットとしても、多くの観光客が訪れている。

しかし、ここを通るとなると、目もくらむような絶壁が行く手を遮り、名うての難所である。ただし、今日では道路が整備されているので難なく通れるが、それでも数年前に、車が数十メートルの崖下に転落し、乗車していた三人が死亡するという、交通事故が発生している。

忠敬日記では、「波荒舟行難成、歩行して・・・」と記している。つまり難所故、舟で測量するつもりだったが、波が高く舟での測量は困難だったので、歩行で測量した、ということである。

また、宜珍の巡廻日記では、次のように記している。ただし、宜珍は、高浜に帰っており、これは宜珍の秘書的関



奇岩折りなす天草西海岸

係者かあるいは子（養子）の定温か信親の記述か。

曇天戌亥風強打降不絶・卯刻頃御乗船 風波強御座候
得共押而御測量之御積ニ而御出立 船方御測量難相成候
ニ付 海辺付俄ニ道捨ニ而陸測量ニ而大江高浜境まで相
済申上刻頃高浜御着

と、簡潔な文だが、舟でダメなら陸で行くしかない。しかし、道はない。ならば道を作ろう。といっても、波飛沫を被りながら、荒磯に道を作ってまでの執念ともいえる測量。測量するのも大変だが、俄かに道を作らされた地元民も、半ばあきれつつの作業であったのではなからうか。

また由比質は「伊能忠敬の天草測量」のなかで、この様子を次のように述べている。(意訳)

十月七日大江村から、高浜村に掛けて沿海実測に取り掛かった時、風強く波荒く、非常に困難したが翁(忠敬)は船頭を叱咤督励、無理に船を出さしめた。

然るに到底危険であるので、やむを得ず船を止め返したが、それでもまだ止めない。大江村から高浜村まで名に負う海岸の難所を道なき道を拵えて、陸上から実測を敢行して高浜村まで進んだ。(天草島鏡収録)

また『伊能忠敬』大谷亮吉著に、忠敬の逸話が、17点に渡って書かれているが、この中にこの時のことがこう書かれている。

忠敬もと船を好まず。然れども実測業務を行わんがためには、風雨の際といえども乗船を少しも乗船を止

めるどころか、舟子の躊躇するにあたって、これを叱咤激励し、危険を冒したること少なからず。かつて天草諸島を測りたる時、一日風雨險悪にして、舟子等が出船を断つた。忠敬即ち曰く。九州男子の勇敢なるは、世に定評がある。然るになぜ怯懦きょうだなるやと。舟子等これを聞き憤激し、強いて舟を出したが、転覆せんとする幾度なるかを知らず。死力を尽くしてようやく一地に避難し、事なきを得たりと。

またある時風雲急にして、舟子等船を出すを欲せず。忠敬曰く、余の見るところをもつてすれば、暴風雨の兆し無し。速やかに船を出すに若かずと。よつて舟子を促して出船させる。然るに行くこと幾ならずして、風雨大に來たり。航行は頗る困難に至りて、舟子等は不満に堪えずして曰く。先生は天文家なりと聞くが、天気に関する予想の当たらないこと。何でそのことは甚だしいのかと。風も雨も中天の事なり。その変動、動きもすれば以外のこともある。余は天文家にして中天家にあらざるがゆえに中天の事、あるいは時に当たらないこともあると。

ただし、註として、この逸話は「伊能家伝説、天草上田宜珍記録」とある。つまり、偉人は逸話を生むで、これは史実ではなく、後世の人の作り話であることは否めない。

しかし、筆者は、これを真実に近い話として信じたい。つまり、このくらいの根性と使命感がなければ、こんな偉業を為し得るものではないからだ。

天草下田温泉

この日坂部隊が泊まった地は、現在の下田温泉の地である。この下田温泉は、建武二年（1335）、後醍醐天皇の時代。白鷺が湯あみにに來ることから、発見されたという、歴史のある温泉である。

現在天草には、自治体や民間によって、数多くの温泉が掘削されてきているが、それまでは天草で唯一の温泉であった。さて、坂部隊が泊まったころの温泉の様子はどうかだったのだろうか。温泉宿があったのかどうか、村人が温泉を利用していたのかどうか。坂部隊員が温泉に入ったのかどうか、ちよつと気になるところだ。文化六年の宜珍日記には、「大島洲崎老母（国民屋一統の小山氏）並びに孫娘、下津深江へ入湯へ参る・・・」とあり、湯治があつていたのは確かだ。

測地・高浜村（天草市天草町）

都呂々村、志岐村・上津深江（苓北町）

泊地・【伊能隊】高浜村（天草市天草町）

【坂部隊】富岡町（苓北町）

《測》

朝曇り度々小雨

【伊能隊】

7時出発。

昨日測留めの高浜村西平より開始。竹ノ迫、デン迫、田代、ボシ、崎山、松葉、高浜本村江尻、夷ノ本、宮ノ前、舟律、諏方通り、それより小田床村鬼岡浦、横枕迄測る。手分の側と合測（7・7km、外に舟津より止宿打ち上げ、中向、久俣ノ下169m）。
宿・前日と同。

※舟津を舟律、諏訪を諏方と誤記。

【坂部隊】

4時頃下津深江村出発。

都呂々村木場(木)印より始める。順測。

19日目 11月4日（十月八日）

※ 国性寺領年柄村、内田村、志岐村地先富岡町（五印を残す）、**㊦**印迄測る（6・7 km）。**㊧**印から**㊨**印まで105 m、また**㊩**印から**㊪**印迄2・1 km、袋から曲崎片側測1・4 km、合計10・3 km。
15時富岡町着。

本陣・荒木三左衛門。

別宿・末屋市三郎。

※ 国照寺を国性寺と誤記。

㊫は五丁目、**㊬**は百閒土手、**㊭**は石橋、**㊮**とは袋湾のことだろう。五丁目は、富岡の町割りの一、橋は大手門の所にあつた石橋（現存していない）のこと。

《巡》 西風が激しく雨降り止まず

伊能様休足。

代官様も休足。

下河辺様永井様測量に出立。高浜村小田床村境まで済む。

15時頃帰宿。

一、明日当村より富岡町迄陸路で行くはずのため、その旨を富岡へ泊まっている坂部様付き添いの大庄屋へ書状を差し出す。

一、今晚月を見せてもらおう。付廻りその他高浜役座の衆、あらまし見せていただく。20時頃済む。天体観測も21時頃に済む。

《宜》

伊能様はお休み。下河辺様上下6人、7時頃出発。大そうづ測量済力所より、海辺通り道順に小淵まで測量。それより高札場まで測量。白洲へ渡り、諏訪社いて昼食。それより小崎海辺通り小田床横枕まで測量。15時頃当村へ引き取り。

今晚月を見せてもらおう

この日は、宜珍巡回記によると、忠敬は休息しているが、忠敬日記にはそれを記していない。

《巡》には、夜は望遠鏡で月を見せてもらった「今晚之月拝見ニ 附廻中其外高浜役座之衆中荒増御見セ被成下 尤戌刻頃迄ニ相済」と記している。宜珍を始め、村人が初めて望遠鏡で月を観て、その喜びやはしやぎようが目に浮かぶ。

天気は悪かったようだが、夜半には晴れたのだろう。

この日は陰暦の八日なので、月は半月。満月だったらもつと喜びがあったと思う。当時の望遠鏡の精度がどのくらいだったか分からないが（かなりの精度であったという評もある）、あばたも覗られたものと思う。後述の大谷によれば、「鏡玉はすべて単玉にして色収差が存在するにも係らず、影像は比較的良好鮮明である」としている。ただし、この書は大正六年に出版されたものであるが。

当時はまだ、月にはウサギがいると信じられていた？頃のこと、村民が科学に触れた瞬間であった。

「伊能忠敬」大谷亮介編著の中に、この望遠鏡についての記述がある。要約すると。

寛政十二年に於ける忠敬所蔵の測器目の中に、

星鏡	長	七尺五寸 (2・25 m)
星鏡	長	五尺 (1・5 m)
望遠鏡	長	三尺 (90 cm)
望遠鏡	長	二尺四寸 (72 cm)

の目がある。

星鏡とは専ら天体観望に用いた長大の機器を言い、望遠鏡は主として遠距離にある他物を望見するために用いた。この中で最も大きいものは、図に示すように、4個の1閉帳製の円筒からなり、使用しない場合は、これを短縮できる構造となっている。

対物鏡には直径一寸五分、焦点距離約7尺の両凸単鏡玉を用い、これを絞って8分5厘の口径である。接眼鏡には2寸1分ばかりの間隔を持って直径1寸1分余り、及び1寸ばかりの両凸単鏡玉を連結したものを使用し、逆影像が生じる配置となっている。

もう一つの星鏡は、全長5尺ほど。ただし、接眼鏡は3個の単鏡玉より成り、直影像の配列となっている。これ等星鏡の鏡玉は、和泉国貝塚の岩橋善兵衛の製作によるものである。

以下云々。

宜珍は、単に「今晚之月拝見ニ・」と記しているだけで、前述したように、望遠鏡で見たのか星鏡で見たのかは不明である。ちなみに、星鏡とは、現在でいうところの天体望遠鏡であろう。

但し、望遠鏡は、当時宜珍も所持していたことが、「宜珍日記」からも見て取れる。

それにしても、当然とはいえ、現在の物と比べ、かなり的大型である。